●特集● 第65回大会レポート（於：東京家政大学）

大会は発表の場であると同時に議論の場である。直接的な対話はもちろん、議論を聞く会員同士の表情も響き合っていく。大会に参加する中で何を感じ、考えたかを振り返ることによって次の新たな研究を拓くことを期待したい。

第65回大会を終えて

第65回大会実行委員長　網野　武博

日本保育学会第65回大会は、関東ブロックにおいて東京家政大学板橋キャンパスを会場として5月4日、5日の両日に開催されました。今回は、会場校の学事の都合上、例年と異なりゴールデンウィークの最中に開催することとなりました。大会前日の3日に附属幼稚園の保育公開、ナースリールームの施設公開を催し、研究発表等に関しては4日は18時過ぎまで、5日は17時近くまでプログラムを組みました。5月3日は雨風に見舞われるなどそれまでの不順な天候が続き、4日の午前中まで雨模様の中で開かれましたが、その後は好天に恵まれ、無事盛会裡に終えることができました。実行委員会の方々の長きにわたる準備と実施にあたってのチームワークと、学生達のホスピタリティあふれる協力をいただき、多くの参加者の方から温かい感想のお言葉をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

初めてのゴールデンウィーク時開催につきましては、どの程度の参加者を迎えることになるか、予想がつかない面がありました。しかし、保育公開・施設公開も約80名のご参加をいただき、大会の2日間は2800名に近い参加者を数えることができました。また、ゴールデンウィーク時開催に関しても、色々なご意見をいただくことを予想しておりました。しかし、実行委員会でとくに配慮すべきご不満やご批判の意見をいただくことはなく、逆に、例年は土日の開催にギリギリに到着し、2日目は当日中に慌ただしく帰宅しなければならなかった事情と異なり、「余裕をもって参加でき、前日の保育公開・施設公開にも出席できた」、「いつもはゆっくり参加できない2日目のプログラムに最後まで参加できた」などの感想をお聞きできたことを付記させていただきます。

大会のテーマとした「Children First～子どもの幸せ・保育者の生きがい～」は、記念講演、実行委員会企画の2つのアフタヌーン・レクチャー、4つのシンポジウムを通して、大切な思い、願いを共有することを心がけました。また、国際シンポジウム、保育政策研究委員会シンポジウム、編集常任委員会ワークショップ、災害時における保育問題検討委員会シンポジウム、そして、34の自主シンポジウム、287の口頭発表、497のポスター発表、6つのビデオ実践研究発表もほぼ予定通り終えることができました。会員の皆様方のご尽力、ご協力に心から御礼申し上げます。

今回は、ブロック毎の開催の第1回目にあたります。ブロック単位での開催にあたっては、それぞれの地区の特徴を生かしてすすめることが大切であると思います。主として担当する学校がひとつとは限らないこともあるでしょう。今回は東京家政大学が会場校としてそれを担いましたが、その開催にあたっては相当な準備態勢、連携、甚大な労力を必要とすることをあらためて強く実感したところです。大会の質を保ちつつ、あらゆるところに心を配り、会員のために寄与できる学会の実施にあたって、その課題を検討し克服していくとともに、特にさまざまなところでの会員の皆様のご理解、ご協力をいただくことがより一層求められる時代に入っていると思います。

以上報告を申し上げ、皆様方のご協力に心より深く感謝申し上げます。

日本保育学会第65回大会実行委員会企画シンポジウムⅣ

Children First －保育学としての保育内容を問う－

前田　和代

シンポジウムは司会者の河邉貴子先生から「保育内容としての『遊び』が無くなってしまう危機感」が語られるところから始まった。私自身、幼稚園教諭としての経験から「遊びの重要性」を実感し、現在ごっこ遊びの研究をしているので、この言葉には大きな衝撃を受けた。教師として、遊びを通してこそ子どもたちが多くの経験や学びを得ていると実感していた私にとって、保育内容から遊びが無くなるとは、大変な問題だからである。

例えば、子どもたちの運動能力を高めるために一斉にマラソンを行えばよいというような考えが、一般社会に広まることによって、保育内容から遊びの中で運動をすることの意味が消えていくということである。しかし、同じ運動をしたとしても、子どもが保育者の

指示によってすることと遊びは同じ保育内容といえるのか。活動そのものは同じように見えたとしても、遊びではない保育内容は、子どもたちにとって、本質的に、どのように違うものなのだろうか。

話題提供者の杉原隆先生は、幼稚園における子どもたちの運動量を全国調査の結果に基づいて詳しく話された。その調査結果は、専門の体操の先生による指導を受けるよりも、子どもたちが自発的に行う遊びの方が、運動量が多いことや運動能力が高いことなどを、数値的に証明できていることを示していた。つまり、子どもは遊びを通して運動能力を高めていることを研究成果として明らかにしていると言える。今後、保育内容としての遊びを守り、また、一般の人々や行政を説得していくためには、このような、乳幼児の育ちにとっての遊びの優位性を証明する研究が欠かせないことを実感させられた。

田代幸代先生は、幼稚園教諭としての経験が長く、遊びについて具体的に実践し、研究されている先生であった。遊びが充実するためには、遊びの質を高めることが重要であり、そのためには、保育者の確かな幼児理解と教材研究が大切であることを極めて具体的な事例を基に話された。子どもの育ちを保障する遊びを実現するためには、保育者による幼児理解と教材研究から次の保育へとつなげていくことが必要であることが明らかにされていた。私自身の研究においても、ごっこ遊びの特徴を解明し、それを踏まえて援助することが、子どもの育ちにつながることを明らかにしたので共感できる内容であった。ここからは、実践の場から、保育内容としての遊びの重要性を解明する研究が急がれることに改めて気付かされた。

前原寛先生の提案の中心は、遊びを捉える際の時間であった。つまり、延長保育の時間や子育て支援における遊びの質はどうなっているのだろうかという問題提起であった。確かに、子どもにとっては、延長保育等の時間も大切な保育時間であり、遊びを通して多くの経験をする場である。前原先生の提案から、私自身にとっては、保育内容としての「遊び」の捉え方の幅を広げる必要性を再確認することとなった。

本シンポジウムに参加することによって、保育内容としての「遊び」の存在を自明のこととせず、さらに遊びの質の保障について、実践を踏まえた研究を深めていきたいと考えることができた。

●*Profile*
前田　和代（まえだ　かずよ）
彰栄保育福祉専門学校　講師
現場の実践を踏まえた幼児期の遊び、特に、ごっこ遊びに着目した研究を進めている。

編集常任委員会企画ワークショップ
保育学の論文作成にどう取り組むか2　に参加して

千田　隆弘

本企画の目的は保育学研究の量的増大に関わって質の向上をどう図るかという保育学研究の基本的な研究課題に答えることにあった。「保育学研究」は2011度から年３冊の発行となったが、掲載論文数が増えるに伴って研究的な質の低下を招くという問題は常に危惧されている。それを避けるためにはどのような方途が考えられるのか。この問題に対して比較的若手の実力ある研究者３名が彼等の論文作成の事例に則して報告するという内容であった。予想外に参加者の関心は高く、企画者の予想を大きく上回る約135名の参加があった。

最初は前回の学会で研究奨励賞（論文部門）受賞者の杉田穏子先生（青山学院女子短期大学）の「違和感からの出発」という報告で、研究論文を書くことは難しいが苦労してでも書いて良かったと思える価値を伝える内容だった。以下、その中で特に印象に残った点について述べる。

それは杉田先生の言う「違和感」についてである。先生は論文を書いていく上で違和感を持つようになったが、それには２つの理由があるとして次のように説明する。

１つ目は、「自分が求めているのは子どもの変化を描くこと」であり、そのベースには「子どもは変化しなくてはならない・変化することが望ましい」という考えがある。しかしこの視点はややもすれば「変化する子は価値があり変化しなければあまり価値がない」という見方になってしまう。子どもの発達の変化を描くことは本来研究者の仕事であるのに、問題の責任を子ども自身に押し付け能力論に帰してしまっているのではないだろうかという不安がある、という点である。

２つ目は「プレイルームの中で１対１で子どもに丁寧に関わって良い反応が見られたとしても、その変化は子どもの生活の中にどのような豊かさをもたらすのかというジレンマ」があり、そうした悩みを抱えている時に出会った「社会モデル」の考え方は問題の責任を個人とする「個人モデル」と異なる、という点である。

私は問題の責任を社会とする「社会モデル」を初めて知り、「個人ー社会」関係だけでなく「子どもー大人」・「子どもー環境」関係といった視点の置き替えも可能だということ、言い変えれば視点を換えることによって答えが変わることに気付かされた。物事を一面的に捉えたりステレオタイプに片付けたりしないよう、研究は勿論、授業や学生指導においてもこの考え

方を忘れないでいたいと心がける次第である。

また、字数の余裕がないので此処には書けないが、他の２名の先生方からも貴重な学習をする機会となった。「ワークショップ」ではなく「シンポジウム」形式の企画であったことは残念だったが、これからも保育学の論文に携わる者として多くの学びある内容であり、論文を書く上での心構えや手がかりの見つけ方を知ることができた。歴史的に新しい学問である「保育学」構築の過渡期に我々は置かれているのだと再実感し、その使命の一端を私自身も担っているということを再確認した時間でもあった。

●*Profile*
千田　隆弘（せんだ　たかひろ）
中部大学　講師
研究テーマ　保育内容（環境）、児童文化、遊び、遊び空間、遊び道具

ポスター発表Ａ－（１）
幼保一体化・幼保小連携などに参加して

山口　宗兼

『幼保一体化・幼保小連携』は古くて新しいテーマである。一昔前になってしまうのかもしれないが、1989（平成元）年頃は、新要領（６領域から５領域へ）そして生活科の新設によって、かなりのフィーバーぶりであったと思う（フィーバーは死語か）。当時は幼保小連携に関連する公開授業・公開保育が盛んになされていたように思う。「はいまわる経験主義」にならないようにと…。そして現在、小１プロブレムやスタートカリキュラムなどを背景に、再び脚光を浴びているように思える。

本ポスター発表は５月４日の午後に行われた。「ドイツにおける幼小連携・接続の取り組み―研究動向と実際―」においては、豊田和子氏（桜花学園大学）によって、現在のドイツの幼小連携・接続における実際と課題について、歴史的考察を含め丁寧に説明がなされていた。また「統一後のドイツにおける保育・就学前教育事情（その３）―ベルリンの教育プログラムにおける就学前教育改革―」（桜花大学保育学部研究紀要・第10号・2012年）という貴重な資料も頂戴した。

「幼保小の生活及び学びの連続性を探る―小学１年生の行動観察から―」においては、新井美保子氏（愛知教育大学）らによって、観察事例の紹介と丁寧な考察がなされていた。小学校教育の紹介ということもあり、とても多くの参加者が立ち止って説明を受けていた。以上の他、ポスター発表Ａ（1）においては総数14の精度の高い研究発表がなされ、活発な議論が展開されていた。

また、本発表会場外ではあるが、小川博久氏（聖徳大学）・岩田遵子氏（東京都市大学）らによる自主シンポジウム「保育環境としての保育者の役割―人的環境であるとともに環境構成者として―」においても幼保小連携に関連する沢山のキーワードが散りばめられた討論がなされていた。特に内山隆氏（札幌国際大学）による過去の実践研究報告は幼保小連携教育において再評価・再検討がなされればと感じた。

『幼保一体化・幼保小連携』において重要なことは、早期知育型かつ飼育型教育にすり替えられないことである。そして、幼稚園教育・保育所保育における１丁目１番地である“自発的活動としての遊びが発達の基礎を培う重要な学習である”ことを何としても譲らないことである。このことは、ゆとりある教育からの転換に逆行していることのようにも思えるが、幼保小中高大までのカリキュラムを抜本的に再検討し精選することが大切であると考える。例えば、小学校１年生の国語科において「平仮名、片仮名そして漢字80字」を詰め込むことが適切であるか否かを幼保小中高大の研究者で検討する余地は無いのであろうか。幼保小において、子どもはもっと遊ぶべきである。小１プロブレム等様々な諸問題の解決策を生活科の内容に押しつけているように見えなくもないことから、いっそのこと生活科から独立した、遊び科を小学校教育において新設するというのはどうであろうか。

●*Profile*
山口　宗兼（やまぐち　むねかね）
北海道文教大学　講師
専門は幼児教育学。山形短期大学（現在の東北文教大学）助教授を退職し３年間のイクメン生活を体験したことから、男性の子育てや男女共同参画社会についても関心がある。

自主シンポジウム24
保育カンファレンスの「質」を考える
－園内研修における感情・関係・過程－

原　孝成

保育の「質」の向上のためには、保育者の専門性の向上が不可欠であり、園内研修や保育カンファレンスの重要性が再認識されている。本シンポジウムは、「感情」「関係」「過程」に焦点をあてることで保育カンファレンスの「質」を具体的に検討し、議論を深めるという企画者、砂上史子氏（千葉大学）と安見克夫氏（東京成徳短期大学）の企画趣旨のもと開催された。司会者は箕輪潤子氏（川村学園女子大学）、話題提供

者は入澤里子氏（千葉大学教育学部附属幼稚園）、安達譲氏（せんりひじり幼稚園）、中坪史典氏（広島大学大学院）、指定討論者は岸井慶子氏（鎌倉女子大学短期大学部）であった。

まず、入澤氏からは、教育課程の見直しのために実施された、食事場面のビデオカンファレンスによる園内研修の実践研究が紹介された。１つの場面を多くの人と一緒に観るカンファレンスを通して、子どもたちの発達の様子や子どもたちへの理解が深まったと同時に、保育者の援助の仕方の違いや様々な思いや考え方に触れることができ、そのことが保育観の広がりにつながった事例が報告された。次に、安達氏からは、これまでに幼稚園で実際に行われてきた保育カンファレンスの実践活動を背景に、保育カンファレンスの意義と具体的な取り組みについて紹介された。主体的な参加を促すための条件として、①カンファレンスの場の空気、②同僚との関係、③具体的な仕掛けや配慮が必要であることが提案され、「やって良かった」という喜びが重要であることが示された。最後に、中坪氏からは、市販の保育ビデオを用いた保育者の談話スタイルに関する研究報告が行われた。その中で、「～ね」や相づち、置き換えなど同僚のことばを相互に共有するスタイルと、状況分析や批判的思考などことばの相互共有が低いスタイルがあることが報告された。

指定討論では、岸井氏から「ビデオをみて話をすればカンファレンスになるのか」、「カンファレンスをやってみたけど、何も積みあがらない」などの現場の声もあるなか「カンファレンスとは何か」を問い直す必要があるのではないか。また、保育について語るだけでレベルアップになる若い人もいれば、それだけでは満足できない保育者もいる、カンファレンスにおける役割分担や進め方、何が積みあがっていくのかを精査していく必要があるのではないか、という観点から討議が進められていった。さらに参加者から「現場が自立的にカンファレンスを実施していけるようにするために、何が必要かを研究者が情報提供して行っていく必要がある」という意見が出された。保育カンファレンスは一様のプロセスではなく多様な目的や形態で実施されるものである。カンファレンスを行う際には、今ここで求めている（求められている）ものは何かをカンファレンスに参加する保育者自身が問い直してみることが、その「質」を高めていくものであるのではないかと感じられた。

●*Profile*
原　孝成（はら　たかあき）
西南女学院大学短期大学部　教授
研究テーマ　園内研修をとおして新任保育者がどのように変化していくか、また、効果的な実習指導の在り方について関心があります。